

実践総合農学会 ニュースレター

Society of Practical Integrated Agricultural sciences NEWSLETTER 第24号 2022年10月31日発行

目次

ごあいさつ

スマート農業と実践総合農学

実践総合農学会会長

門間 敏幸 … 4

2022年度実践総合農学会シンポジウムに参加して

—食農を核とした地域活性化のカギとなるガストロノミーという考え方—

東京農業大学国際食料情報学部国際食農科学科教授

上岡 美保 … 5

実践につながる新たな総合農学の研究知を求めて

東京農業大学地域環境科学部地域創成科学科教授

町田 怜子 … 6

2022年度オンライン大会に参加して

帯広畜産大学環境農学研究部門農業経済学分野准教授

岩本 博幸 … 7

個別研究報告に参加して

東京農業大学大学院地域環境科学研究科地域創成科学専攻

池内 風香 … 8

小清水ガストロノミープロジェクトでの取り組み

東京農業大学生物産業学部自然資源経営学科

小笠原 龍 … 9

2022年度実践総合農学会シンポジウム 閉会ごあいさつ

実践総合農学会副会長

佐々木 昭博 … 10

編集後記

2022年度実践総合農学会総会、個別研究報告、シンポジウムを終えて

実践総合農学会事務局長

堀田 和彦 … 11

新会員のご紹介

… 11

2022年度実践総合農学会本大会 個別研究報告プログラム

No.	座長	時間	タイトル
			氏名（所属） ○ = 報告者
1	原温久	10:00 ～ 10:20	視覚障害者が体験可能な農作業工程に関する研究
			○池内風香（東京農業大学地域環境科学部） ○町田怜子（東京農業大学地域環境科学部） 藤川智紀（東京農業大学地域環境科学部）、高畑健（東京農業大学農学部）、茂木もも子（東京農業大学地域環境科学部）、宮林茂幸（東京農業大学地域環境科学部）、入江彰昭（東京農業大学地域環境科学部）
2	原温久	10:20 ～ 10:40	地域の福祉力を高める農福連携の相互学習
			○町田怜子（東京農業大学地域環境科学部） 大室健治（農林水産省農林水産技術会議事務局）、中本英里（農研機構西日本農業研究センター）、宇良千秋（東京都健康長寿医療センター）、サカール祥子（合同株式会社十色）、青柳慶一（小菅村社会福祉協議会）
3	北田紀久雄	10:40 ～ 11:00	気候、立地及び栽培法から検討した適用可能な農業技術の包括的評価方法に関する研究 －外国人技能実習制度における農業分野の技能移転を対象として－
			○染谷香里（東京農業大学大学院地域環境科学研究科） 下嶋聖（東京農業大学地域環境科学部）、鈴木伸一（東京農業大学地域環境科学部）
4	大浦裕二	11:00 ～ 11:20	都市住民における子どもの食育の現状と意識に関する考察
			○依田萌（東京農業大学国際食料農業科学研究科）
5	大浦裕二	11:20 ～ 11:40	アニマルウェルフェアに対する消費者支払意志額とその規定因 －動物倫理の観点からの接近－
			○岩本博幸（帯広畜産大学）

※一人 20 分【発表時間 13 分 質疑応答 5 分 交代時間 2 分】

2022年度 実践総合農学会 シンポジウム

開催日時：2022年7月16日（土）13時20分～15時40分

開催方法：オンライン ＊会場は北海道小清水町アグリハートセンター

主催：実践総合農学会 後援：東京農業大学

テーマ：ガストロノミーで広がる地域の未来

プログラム：

13:20	開会	
13:20-13:25	開会挨拶	実践総合農学会 会長 門間敏幸
13:25-13:30	座長解題	堀田和彦

北海道小清水町から配信

13:30-13:35	司会挨拶	上田智久
13:35-14:05	講演 1	「ガストロノミー：未来につながる街へ」 吉本博明（南九州大学健康栄養学部 学部長）
14:05-14:15	講演 2	「東京農大ガストロノミーが目指すもの」 江口文陽（東京農業大学 学長）
14:15-14:20	（休憩）	
14:20-14:25	小清水ガストロノミーイベント準備風景中継	
14:25-14:35	講演 3	「農家としての誇りと景観作物の価値」 今井貴祐（今井ファーム代表）
14:35-14:45	インタビュー	島田亜加利（国際食農科学科4年） 小笠原 龍（自然資源経営学科1年） インタビュアー：上田智久
14:45-15:05	対談	「地域創成におけるガストロノミーの可能性」 江口文陽×吉本博明 ファシリテーター：上岡美保
15:05-15:20	質疑応答	

15:20-15:30	表彰式	
15:30-15:40	総括・閉会挨拶	佐々木昭博

ごあいさつ

スマート農業と実践総合農学

実践総合農学会会長 門間 敏幸



スマート農業という言葉は、ここ数年で全国の農業者、農業関係者に広く普及しており、わが国農業の一つのトレンドとなっている。私の小学生の孫娘でさえ、夏休みの宿題で「スマート農業について調べなさい」というテーマが与えられたくらいである。私自身もスマート農業に関する各種のプロジェクトの審査員をお願いされるとともに、私が事務局長を務める組織でも、最近スマート農業に関するセミナーを主催し、その普及にささやかではあるが貢献している。一言でスマート農業と言ってもその関連する領域はすべての農学はもとより、情報技術、ロボット工学、AI技術、人工衛星、ドローン、環境制御技術など様々な技術が関連している。そのため、スマート農業に関しては様々な定義がな

れているが、私は「メカトロニクス、ICT・IoTなどの情報処理技術、AIなどの先端技術を活用したデータ活用型農業」と定義している。スマート農業のメリットは、①省力・低投入・大規模農業の構築、②一定の高品質農産物の安定生産、③篤農技術の一般化、技術習得時間の短縮化、効率的な栽培・経営管理技術の確立、④軽労・労働安全技術の一般化にあり、若者・新規就農者が受け入れやすく夢をもてる技術である点にある。農林水産省はスマート農業技術を全国に普及すべく、2019年度からスマート農業実証プロジェクトを全国で展開している。2022年度までに全国202地区で実証が行われ、スマート農業普及の大きな起爆剤となっている。

スマート農業実証プロジェクト参加農家のスマート農業に対する評価を見ると、①労力の軽減や作業の効率化、②データによる技術・作業の見える化と適期作業の実施、③適期の収穫・出荷、④新規就農の後押しと若い従業員の意欲向上、⑤規模拡大の推進、⑥篤農技術の見える化と習得、といった効果が評価されている。しかしながら、スマート農業が農家に受け入れられ、さらなる普及を実現するためには、導入コストの飛躍的な低減が不可欠であり、重厚長大技術から低コスト簡便技術（スモール・スマート技術）への転換が必要である。また、IoT、AIなど高度な情報技術の活用、多様なセンサーなどの技術開発と活用を支援するスマート農業支援ベンチャーやサポート人材の育成、さらにはスマート機器を地域でシェアリングして有効活用とコスト削減を同時に実現することも不可欠である。

今後の日本農業の一つの重要な進路となるであろうスマート農業の開発・普及・社会実装にあたっては、農学関係者にとどまらず、農業者、関連する民間企業や多方面の研究者の英知を結集することが不可欠であり、実践総合農学が目指すところと軌を一にするものである。実践総合農学会の会員各位におかれては、是非、様々な形でスマート農業の普及に貢献して欲しい。きっとあなた方がこれまで蓄積してきた研究成果を他の研究者と一体となって新たな日本農業の発展のために活かす道が開かれるはずである。

2022 年度実践総合農学会シンポジウムに参加して

—食農を核とした地域活性化のカギとなるガストロノミーという考え方—

東京農業大学 国際食料情報学部 国際食農科学科 教授 上岡 美保



2022 年度実践総合農学会のシンポジウムは、7月16日（土）に開催された。テーマを「ガストロノミーで広がる地域の未来」と題し、コロナ禍の中でデジタル化を活用した形で、発信は北海道小清水町から、参加者はオンラインでの視聴であった。こうしたスタイルをとったのには理由があり、発信地であった小清水町では、並行して東京農大オホーツクガストロノミーのイベントが開催されていたことにある。そのことについては改めて後述する。

さて、本学では、現在、「総合農学」を展開すると同時に、「東京農大ガストロノミー」という考え方を重視している。この「ガストロノミー」という言葉は一般的には美食やスローフードと同様に捉えられることが多い。しかし、もともとは古代ギリシャ語で「ガストロス（消化器）」と「ノモス（学問）」を語源とする言葉とされ、食と理学や医学、農学、生物学などとの関係、食の歴史、文化、哲学、社会学、人類学、芸術などとの関係といったように、自然科学のみならず社会科学に至るまでの幅広い学問で科学的に捉えられるものでもある。つまり、ガストロノミーは、食と農を科学する「総合農学」と大いなる親和性があり、今回のシンポジウムでは今一度、ガストロノミーの概念、地域に果たす役割等について考えようとして取り上げられた。

シンポジウムでは、基調講演として南九州大学健康栄養学部吉本博明学部長による「ガストロノミー：未来につながる街へ」、東京農業大学江口文陽学長が「東京農大ガストロノミーが目指すもの」、地元農業生産者の今井貴祐氏（今井ファーム 代表）が「農家としての誇りと景観作物の価値」についてそれぞれ講演するとともに、「地域創成におけるガストロノミーの可能性」について、江口文陽学長と吉本博明学部長が対談を行った。

日本には、地域的にガストロノミーを推進している事例として「鶴岡ガストロノミー」「霧島ガストロノミー」などが知られているが、吉本学部長は、鹿児島県霧島市で展開されている霧島ガストロノミー推進協議会立ち上げの立役者の一人である。限界集落の増加や近い将来に消滅しうる集落、とりわけ農村地域にそうした集落が集中しており、基幹作物の収益低下や耕作環境の悪化、自然災害なども相まって、急激な人口の減少により消滅集落となる。それを救うためには、今一度、当該地域にしかない食や農の資源に目を向け、その価値をしっかりと評価すべきと強調した。霧島市では、霧島ガストロノミーの10カ条（地域性、神事・風習・食文化、職人氣質、地産地消、伝統と革新、健康志向、環境型、創造性、もてなしの心、褒め合う文化）の考え方にに基づき、地域独自のブランド認定や新商品を開発している。自身の産品が評価されることで、生産者や製造者には自信と誇りの気持ちが芽生え、地域に根ざしつつさらなる高みを目指す契機となっていること、また、認定を通じて生産者自身が発信し、様々な主体と連携する機会を生んでいること、市民としても改めて地域を知るきっかけとなるとともに、全体として食（農林水畜産物・食品・料理等）を核とした地域の活力と地域愛の醸成に繋がっているとした。また、今井氏は日本の食料基地北海道で広大な農地を耕す中で、品種の差別化や販売ルートの開拓などに努力しているが、生産者自身気がつかない当たり前の景観そのものも実は地域にとっては大きな価値であるとした。

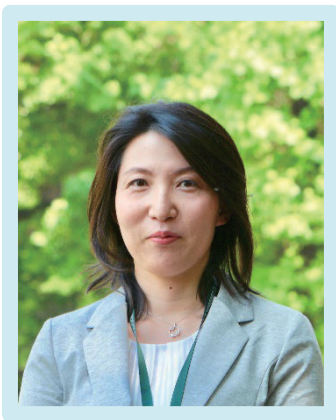
前述したが、シンポジウムと同時に、現地小清水町では「麦を始めとした畑のある風景」、観光スポットを訪れることで、小清水町の農業の理解を深め、小清水町の魅力を体感することを目的としたランチ付き畑ツアー、さらには、小清水町の農業・農村の魅力を歴史的視点から表現した食と芸術との融合、空間演出を通じて、小清水町の農業のあるべき姿や

大切にしていけるモノやコトについてそれぞれが主体的に考えることのできるガストロノミーディナーの開催を行った。これらのイベントは、農産物を生産すると同時に景観を形成する農家、農家の想いと地域を表現した料理を創作するシェフ、それを芸術で表現する芸術家、収穫物で空間を装飾するとともに様々な主体の想いを料理に乗せて提供する給仕人（今回は東京農業大学の学生が担当）、それを学びながら食す地域住民を中心とする参加者など、まさに地域の関係者が一体となって造り上げたものであった。そしてこれらのイベントは、今後、食と農のみならず環境や観光との融合やコラボレーションの新たな可能性を示唆したものとなった。

食料自給率が先進国の中で最低レベルである日本では、地球温暖化による自然災害の頻発、コロナウイルスのパンデミック、原油の高騰や紛争により食料価格の高騰、ものによっては食料不足に陥っている。しかし、まだ耕せる農地と食料生産の余地は残っており、いかにこうした農地を有効に活用していくのが当該地域の活性化のカギであり、ひいては食料安全保障の強化に繋がる。生産者よりもむしろ消費者である国民 1 人ひとりがまずは、それぞれの地域のガストロノミーの考え方を大切にすることがその第一歩になると強く感じたシンポジウムとなった。

実践につながる新たな総合農学の研究知を求めて

東京農業大学 地域環境科学部 地域創成科学科 教授 町田 怜子



毎年、農を基軸にした他分野の研究者、実践者の皆様が参加される「実践総合農学会」に参加すると、実社会の問題に照らし合わせて総合農学から解決を導く議論が深まり、多くの研究示唆を頂きます。

そのため、私は令和 3 年から、実践総合農学会で、障害者等の農業分野での活躍を目指す農業と福祉との連携を図る「農福連携」の個別研究報告を研究発表しています。個別研究報告を通じて、経済、農業現場、施策、人々の生きがい創出等多岐にわたる研究示唆を頂き、さらには、研究議論を通じた社会実装につながる貴重な機会も頂き、学会に参加する度に感謝の気持ちでいっぱいになっております。

令和 4 年度実践総合農学会総会では、2 本の個別研究報告（町田怜子・中本英里・宇良千秋・サカール祥子・青柳慶一・大室健治：地域の福祉力を高める農福連携の相互学習/池内風香・藤川智紀・高畑健・茂木もも子・入江彰昭和・宮林茂幸・町田怜子：視覚障害者が体験可能な農作業工程に関する研究）を発表いたしました。この 2 つの個別研究報告では、農福連携の事例研究から社会福祉施策やインクルーシブ教育につなげる理論的フレームワークの構築に向けた有益な研究アドバイスを頂きました。

障がい者の権利に関する条約第 24 条によると、インクルーシブ教育は「個人の能力や可能性を最大限に伸ばし社会全体の様々な機能を活用して教育の充実を図ること」が目標となっています。特に、インクルーシブ教育では、障害がある者もない者も、「同じ場で共に学ぶ」ことを追求し、連続性のある「多様な学びの場」を用意することが必要とされています。その中で農業は、作付けから収穫までの多様な生産管理を、障害がある者もない者も同じ「場」と「時間」で共体験しやすく、SDGs の「目標 3」である「健康と福祉 (health and well-being)」に掲げられている「地域共生社会で自ら主体的に幸福に生きる力 (Well-being)」を育むことができるという「学術的問い」を強く感じています。

これらの学術的問いは、実践総合農学会での研究ネットワーク、研究交流により探求できております。さらには、実践総合農学会の問題解決型農学から学ぶ「新たな知の創造」は、私が取り組んでいる「東京農業大学こめプロジェクト」のインクルーシブ水田農業や、東京農業大学と東京情報大学共同研究プロジェクト「Society5.0 社会におけるレジリエンス農業の確立に向けた多様な人々の能力を発揮するロボティック・プロセス・オートメーション（RPA）実装の加速化」研究プロジェクトの社会実装の加速化にもつながっております。

これからも実践につながる新たな総合農学の研究知で社会貢献できるように、学生と共に研究に邁進していきたいと思っております。

2022 年度オンライン大会に参加して

帯広畜産大学 環境農学研究部門 農業経済学分野 准教授 岩本 博幸



2022年7月16日にオンラインで開催された学会大会個別研究報告で報告させていただきました。現在においても、新型コロナウイルスによる活動制約のもとで様々な不自由がありますが、一方で、オンラインミーティングの普及によって北海道のような遠隔地からでも容易に研究報告の機会が得られるようになりました。本学会でも関係者の皆様のご尽力によってオンライン開催をご用意いただき、これに参加する機会を得ることができましたことに、感謝申し上げたいと思っております。

今回、私が報告させていただいた研究課題は「アニマルウェルフェアに対する消費者評価とその規定因」というもので、アニマルウェルフェアに配慮して生産された畜産物に対する消費者評価とその背後に存在する意識構造のモデル化に取り組んだ成果を取りまとめたものです。近年、欧米圏で浸透しつつあるアニマルウェルフェアはわが国でも言及される機会が増えてきております。この背景には動物福祉に対する消費者の倫理的意識が存在しておりますが、わが国にはわが国の動物に対する倫理観があり、これを欧米の倫理観と比較検討可能な枠組みで位置づけることを報告では試みております。

消費者の倫理的側面から畜産物の消費行動について考察することは、何よりもSDGsに即した持続的な畜産経営を構築していくために重要だと考えております。つまり、わが国の消費者の倫理的側面に沿った畜産経営の構築、そしてその経営条件としての価格水準等の目標指標を情報として畜産農家に提供することが持続的な畜産経営の構築にとって重要だということです。

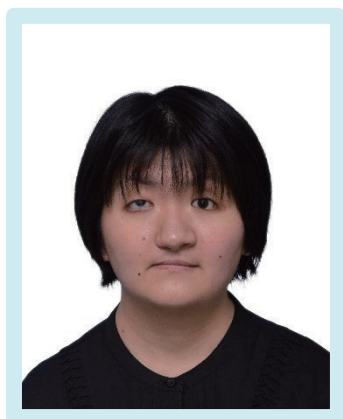
このような、消費者行動研究であってもその動機としては、畜産農家へ還元可能な情報提供があり、私自身が約14年間奉職した農大での経験に由来しております。在職当時、参加した農大の学部横断型の大型研究に参加していた私は、研究代表の先生から「研究としていいものやってください。でも、農大でやるからには農家が使えない成果では困ります」とのご指導を受けました。以来、教育による人材育成を基本に研究成果を社会が利用可能な形で還元するということが、私自身の職業意識の指針になっております。その意味において、私の教育研究職としての学びは農大にあり、僭越な言い方が許されるとすれば『母校』だとも言えるでしょう。

実践総合農学会は、学術研究と実務としての農業をつなぎ、成果の社会還元と人材育成を同時に担う特徴ある農学関連学会であると感じています。その役割が最大限発揮されるのは、学会大会であり、研究報告を通じた参加者間の創発にあると考えております。しかし、

創発が自由に生まれ、活性化するためには『懇親』も必要ではないでしょうか？今回のようなオンライン開催にご尽力くださいました皆様に重ねて感謝申し上げますとともに、皆さまと懇親が深められる学会大会が開催できる日が来ることを心より願っております。

個別研究報告に参加して

東京農業大学大学院 地域環境科学研究科 地域創成科学専攻 池内 風香



この度、2022年7月16日（土）に開催されました、実践総合農学会個別研究報告に参加させていただきました。ニュースレター執筆の機会をいただきまして、ありがとうございます。私にとって今回ははじめての学会発表でしたが、無事に発表を終えることができ安心しております。今回はオンラインでの学会開催となり、対面で多くの方々の前で発表する緊張感は少なかったものの、このような発表の場に慣れていないために少し緊張しました。準備段階のスライドや原稿の作成においては、多岐にわたる分野を研究されている方々にも伝わりやすい発表になるような工夫が必要でした。また、短い発表時間内に収まるように必要な情報を簡潔にまとめるという点でも、研究報告の難しさを実感しました。

個別研究報告で発表させて頂いた「視覚障害者が体験可能な農作業工程に関する研究」は、昨年私が東京農業大学の学部4年生在籍中に実施した調査をもとにまとめたものです。視覚障害者が農作業に参加する上での可能性や課題を調査する内容で、研究段階においては先行研究や事例が少なく、比較的近い分野の文献を参照した点や、私自身を対象とした調査による当事者研究となった点で不安や課題がありました。その中で2ヶ月の調査の間に多くの農作業を体験し、研究の目的に対応する結果を得ることができました。はじめての研究活動にあたって多岐に渡りご指導・ご鞭撻いただきました先生方、また調査実施時に農作業について指導いただき、支えてくださいました皆様のお力添えによって得られた結果と考えております。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。また、個別研究報告当日には多くの質疑をいただき、本研究に対する幅広い視点や課題をご教授いただきました。ご指摘頂いた内容を踏まえて本研究の課題を改めて分析し、有用性・客観性の高い結果を得られるよう、調査・研究を重ねて参りたいと存じます。

この度の個別研究報告では、普段の研究室活動では聴く機会の少ない、様々な分野の発表や議論を聴講させていただきました。皆様の研究報告は大変有意義であり、勉強になりました。これまで学習機会が少なかった分野に関する発表では、新たに興味を抱いたり、私自身の今後の研究活動の参考にしたいと感じることが多々ありました。

この度は、学会発表を通して大変貴重な経験をさせていただき、厚く御礼申し上げます。この経験を活かし、研究内容や発表技術の向上に努めて参りたいと思います。また、はじめての参加でしたが、優秀研究発表賞を受賞させていただき大変嬉しく、なお一層努力していく所存です。

新型コロナウイルス感染症が少しでも早く終息し、対面での学会開催が叶いますことを心よりお祈り申し上げます。

小清水ガストロノミープロジェクトでの取り組み

東京農業大学 生物産業学部 自然資源経営学科 小笠原 龍



この度、令和4年度の実践総合農学会に参加させていただいた生物産業学部の自然資源経営学科の1年小笠原龍と申します。ここでは小清水ガストロノミープロジェクトについて話します。

小清水の舞台で行われたガストロノミープロジェクトで自分は、農家さんが考えていることや、悩んでいること、小清水の農業がどう移り変わっていったのか、農業をガストロノミーでどう表現するのかに関心を持って取り組みました。ガストロノミープロジェクト前半では会場になる農地に実際に足を運んで、小清水の農業が火山灰や蝗害そして、オホーツクの厳しい気候の中で苦悩し紆余曲折を経て今の形になっていることを知りました。一見同じに見える農地でも歴史や工夫から個性があることを感じました。そして、現在は小麦に対する生臭れ病や、じゃがいもを脅かすシロシストセンチュウ、自然以外にも円安における肥料の高騰といった問題があり、これからの小清水の農業について考えていかなければならないと思いました。そして、そのために今回小清水でガストロノミーを開くのだとガストロノミーの存在意義を再確認しました。

自分達学生の役割は額縁やランタンカバーに麦のオブジェといった小道具や、土間や畑道に白い布を被せて花道を作りました。これらの作業は参加者に異世界を感じさせるための空間演出で、参加者に料理を提供する給仕の係の人やスタッフも顔を白塗りしていました。異世界を感じさせることで、参加者に新しい視点を芽生えさせる意図があります。

さて、学生が担ったことをもう少し詳しくお話ししますと、我々学生は自ら角材を買いに行き、装飾を練り、色を塗って、プロのアーティストの指導も受けつつ自信の作品に創り上げました。また本番の前日は現場に行きパオパオという白い布を土間と、全長350mある畑道に敷いていきました。敷くこと自体は3時間もあれば完了する作業だったのですが、見栄えを考慮しての修正が多々あり作業の終わりが見えず徐々に空が赤色に染まっていく辛い時間がありました。ですが、そんなときも仲間たちは笑顔を決やさずお互いを励まし合いながら頑張りました。自分はそんな仲間に出会えたことが何ものにも代えられない宝物だと思います。

当日は前日の影響もあり急ピッチで最終準備が進められていました。自分は午後から実践総合農学会に参加させていただきました。農大の重役の方々と顔合わせでガチガチに緊張したのをおぼろげに覚えています。江口学長様の考えを直に聞くことができたのは自分にとって大きな刺激になりました。また、インタビューの場で多少のつかえはありましたが、今まで以上にそつなく自分の考えを伝えられたことは大学の講義のおかげで嬉しく思っています。実践総合農学会が終わったあと自分は会場に向かいました。プロのダンサーの方や、音響の方、シェフの織りなす一級品の作品は小清水の農業の美しさを再認識させるもので、自分も引き込まれていました。

今回の小清水ガストロノミーで、農地には個性があること、小清水には小清水特有の歴史や課題があることや、ガストロノミーの中でさまざまな農業の美しさの表現方法があることを学ぶことができました。これからは、それらの経験を活かして様々な農業の課題を広い視野で解決することに尽力していきたいと思えます。

また、出会えた良き仲間たちと学園生活を色鮮やかに彩っていきたいです！

2022 年度実践総合農学会シンポジウム

閉会ごあいさつ

実践総合農学会副会長 佐々木 昭博



本日（2022年7月16日）の個別研究報告、シンポジウムでご発表いただいた演者の皆様、実践総合農学会にご参加いただいた皆様、お疲れ様でした。新型コロナの感染拡大が治まらない中、今回もオンラインでの開催となりましたが、多くの皆様にご参加いただき、有意義なディスカッションができたことに御礼申し上げます。

午前中の個別研究報告では、学生の皆さんから積極的な発表があり、その中から東京農業大学の池内風香さんが優秀研究発表賞「学生部門」に選ばれました。池内さんが発表された研究は、視覚障がい者が農作業を行う際の、作業工程ごとの可能度と危険度を調査・分析したもので、農福連携を進める上での貴重な知見が得られたことが評価されました。今後の研究の発展を期待しています。

午後のシンポジウムは、ガストロノミーをテーマとして、北海道小清水町から YouTube 配信を行いました。南九州大学の吉本先生、東京農業大学の江口学長、今井ファーム代表の今井様からのご講演、2名の学生さんへのインタビュー、さらに東京農業大学上岡先生をファシリテーターとした吉本先生と江口学長との対談を通じて、それぞれの視点からのガストロノミーへのお考えをお聞きすることができました。

ガストロノミーという言葉については、耳新しく感じていらっしゃる方も多いと思います。私もそのひとりでしたが、今回のシンポジウムで私なりのイメージを持つことができました。それは、表参道や原宿で瞬間風速を競ったパンケーキやタピオカドリンクなどとは対極の、時間的・空間的ストーリーを持つ食を中心とした文化体系と言えるのではないのでしょうか。こうした概念は、地域間、世代間、そして社会の異なる分野をつなぐバックボーンとして、地方創生に重要な役割を果たしていくと考えられます。

本年の実践総合農学会総会では、本学会の改革について提案し、ご了承をいただきました。その内容は、学会の自主性・独立性を高めることを目的として、会費値上げを伴いつつ、会員拡大、広報の充実、関係組織との連携強化と経費削減に努めるというものです。本学会をより活性化するため、会員各位の引き続きのご協力をよろしくお願いします。

本日はありがとうございました。

※本稿は、当日、通信不良により配信できなかったご挨拶を掲載したものです。

編集後記

2022 年度実践総合農学会総会、個別研究報告、シンポジウムを終えて

実践総合農学会事務局長 堀田 和彦



本号は、令和4年7月16日、土曜日に実施された実践総合農学会、個別研究報告、シンポジウムからの寄稿を中心に構成しています。大会にご参加頂いた上岡美保先生、町田玲子先生、岩本博幸先生、個別研究報告を実施頂いた池内風香さん、シンポジウムにご参加頂いた小笠原龍さん等にご寄稿いただいています。ご多忙のところ本ニュースレターにご執筆いただきました大会参加者並びに会員の皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今回もコロナ禍の中、オンラインで無事、実践総合農学会が開催されたことを大変嬉しく感じております。大会では「ガストロノミーで広がる地域の未来」をテーマにシンポジウムが実施されました。現在、東京農業大学が推進しているガストロノミーについて、北海道・小清水町で行われたイベントをオンラインでお聞きすることができました。ガストロノミーという会員にとってもまだ聞きなれない新しい考え、食を通じての地域活性化につながる理念を学ぶことができ、大変勉強になりました。個別研究報告やシンポジウムを通して、地域と深くかかわり地域の問題を実践的に解決しているお話を多く聞くことができ本当に素晴らしい大会であったと思っております。

実践総合農学会では新会員制度や学会報告賞の制度を設けるなどたえず改革を試み、多くの参加を促すと同時に、広く実践的、総合的な現場での農業食料問題解決のヒントとなる情報提供に努めてまいりたいと思っております。また学会改革をより一層推し進め、独立性・新規性の高い学会を目指しております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

令和4年度実践総合農学会入会者リスト（敬称略）

※入会順（令和4年4月1日～9月30日）

氏名	所属	会員種別
染谷 香里	東京農業大学大学院 地域創成科学専攻	学生会員
池内 風香	東京農業大学大学院 地域創成科学専攻	学生会員
山本 陽子	東京農業大学大学院 農業経済学専攻	学生会員
リスキナ ジュウイタ	東京農業大学 国際食農科学科	正会員

実践総合農学会 ニュースレター24号

発行日：令和4年10月31日

編集責任者：実践総合農学会事務局長 堀田 和彦

学会問合せ先：実践総合農学会事務局

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1 東京農業大学総合研究所内

TEL：03-5477-2532 FAX：03-5477-2634 E-mail：spia@nodai-rs.net URL：http://spia.jp/
